エコロジーという洗脳　第２週プレレジュメ

勝亦・白川・高橋・並木

１９７０年代、「公害問題」として扱われていた環境問題から、「環境問題」と呼ばれる環境問題へと意識が転換した。その意識の転換は、何を意味するのであろうか。今回の文献では、「沖縄のサンゴ礁」と「アメリカでのプリウス人気」を具体例に考察している。

そこで、みなさんに考えてきて欲しいことがある。

１．第５章サンゴと、第６章プリウスに対する取り組みの経緯を整理すること。
２．現在の日本における環境問題に対する取り組みを、国と個人の視点から考えること。

以上２点を考える上で、現在の環境問題への対応には、表向きの理由と、その裏に隠された理由があることを意識して欲しい。

その具体的な例として、発表では扱わないが、第７章『洗脳の手段としての「環境映画」その正しい鑑賞法』で取り上げられている２点を以下に示す。

１．『暗殺の瞬間』（1998 年/スウェーデン/監督：シェル・スンズヴァル）
→1986 年に起きた、スウェーデン首相オルフ・パルメの暗殺事件を描く
☆アメリカの主張した、日本とソ連に捕鯨を禁止させる理由
（表向きの理由）動物保護
（隠された理由）アメリカの軍事のための、マッコウクジラの脳漿の独占

２．『チェーン・リアクション』（1996 年/アメリカ/監督：アンドリュー・デイヴィス）
→新しいエネルギー発生装置を開発するプロジェクトを率いる博士の暗殺を描く
☆博士暗殺の理由
→新しいエネルギーの開発＝石油の時代の終了、石油業界への打撃
☆水素エネルギーへ巨額の資金が投入される理由
（表向きの理由）石油にとって代わるクリーンなエネルギー
（隠された理由）水素生成に以前と同じかそれ以上の石油を消費
利益が上がらない他のエネルギーから世間の注目を逸らすため